

---

# 無為浪人

夕月日暮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無為浪人

### 【NNコード】

N9906C

### 【作者名】

夕月日暮

### 【あらすじ】

戦国時代、長浜の地を訪れたさすらい人の物語。

長浜の地に、妙な男がいた。

身なりは汚く「食のようだが、なぜか持っている刀だけは立派なものなのである。

年の頃はまだ二十歳を少々過ぎた程度。

猫を思わせるような相貌に中肉中背の男である。

「あれは呑気なお人だよ」

この男を知っている人は皆口を揃えてそう評した。

確かに男の生活は呑気なものであるとしか言いようがない。なにしろほとんど草の上で寝転がっているのである。

農作業に向かう村人たちの視線の端に、いつのまにか紛れ込むことが多い。

当初は村人も気になり、なにをしているのか尋ねたりした。すると男はひどく愛嬌のある笑みで、

「雲を見とる」

と言うのである。

それが一月続き、村人たちもその男に馴染んでしまった。

男は時折農作業を手伝つたりして食いつないでいる。

その仕事振りは大したものであるため、村の方でも非常に助かっていた。

名は牧泉豊次という。

刀を持つていることから、村人たちはどこかの侍か牢人かと思つていたが、どうも違うらしい。

「わしはどこかの生まれかもよく分からん。育ててくれた爺はどこかの侍だつたそうだが、まあ話したくなさそうだつたから聞かなかつた」

「するとお腰の刀はどちらで?」

「こいつか。こいつは旅の途中で氣の合つた鍛冶師に貰つた」

刀のことを自慢に思つてゐるのか、その話題になると豊次は無邪気に笑つてみせた。

そのくせ刀を使うところを誰も見たことがないのである。

「腰の刀は飾りか」

などと、氣の短い若者連中はからかつたりする。

その度に豊次は、

「使う必要がないから使わんだけだ」

とだけ言つて、取り合わなかつた。

この男が居着いた村の近くに、ある寺があつた。

そこに佐吉という少年がいた。

後の名を石田治部少輔三成。

豊臣秀吉に仕え、その死後に徳川家康と関ヶ原の役で戦い、敗死した人物である。

この佐吉が、ある日道端で寝転がつてゐる豊次に話しかけた。

「お侍様はいつもそこで寝ておられますな」

前々から気になつていていたのか、挨拶も抜きにいきなりそんなことを言い出した。

何事かと思い、豊次が起き上がつてみると、そこにはまだ幼さの残る年齢の少年がいた。

「随分とはつきり物を言つやつだな」

「性分でござる」

「話しかもはつきりとしとる。わしよつよほど侍らしくわ

と、豊次はこの佐吉という少年を面白がつた。

妙な言い方になるが、可愛げのないところがこの少年の可愛い部分のように思えるのである。

「だがわしは侍じやない。氏素性も知れんただの乞食よ」

「刀がござる」

「おうおう刀はある。だがそれだけだ。どこかの家に仕えたわけでもないぞ」

「ならばその刀は飾り物でござるのか」

胡散臭そうな視線を無遠慮にぶつけてくる。

豊次はどうしたものかと思い、ふと顔の横にあつた小石を拾い上げた。

「これをよく見とれ」

寝たままの姿勢で佐吉の方に石を向ける。

それを上に放り投げると、豊次は勢いよく跳ね起きて、落ちていた小石を刀の柄の先で打ちあてた。

わつ、と声をあげたのは佐吉である。

柄に弾かれた小石は正確に佐吉の鼻つ柱に当たり、やうに身をのけぞらせた瞬間、肩に刀を当てられたのである。

一瞬斬られるかと思い、心臓がすくみあがつた。

が、豊次はさつさと刀を手元に引き戻してしまった。

よく見てみると、一度も鞘から抜いていない。

「あはは、すまんすまん。おぬしがあまりに仏頂面だつたものでな」

「愚弄するか?」

「怒るな、わしのこれも性分だ」

透き通る青空の下で、これ以上ない程に自然に笑う。

豊次があまりにも気持ち良さそうに笑うためか、佐吉もとうとう仏頂面を崩して少しだけ笑つてみせた。

「使う必要があれば使う、それだけのものだ。道具とはそういうものであるわ?」

「成る程、確かにその通りだ」

その後、佐吉は最初の無礼を詫び、名を名乗りあげた。

豊次もきちんと起き上がって、佐吉に自分の名を告げる。

お互いが名乗り終えたところで、佐吉は再び元の仏頂面へと戻り、本題を切り出してきた。

「豊次殿は石田村に行かれるのですな」

「そうだな、あそこの人には世話になつとる」

「そこに石田正継という人がおりますな?」

「正継殿か、知つとるや。なんだ、おぬしの父か」  
まだ佐吉が正継との関係を言つていないので、豊次は見事にそれを言い当てた。

佐吉は確かに、石田村に住む地侍、石田正継の次男である。  
だがその関係性を匂わせてもらひないといつのに、なぜ豊次には分かつたのか。

そのことを聞いたたゞと、豊次は不思議そうな顔をして、  
「そういう顔をしておつたわ。話の流れとおぬしの顔を見たら、自然とそう思つただけよ」

と、じく当たり前のことのように言つた。

この男には天性不思議な勘が働くらしい。

「その父に、寺の住持からの手紙を届けて欲しいのです」

「おう分かつた、雲も今日はあまりないしな」

理由になつていらない理由で承諾すると、豊次は佐吉からひつたくるように手紙を受け取つた。

そのまま駆け出そうとすると、佐吉がそれを止めた。

「豊次殿、そんなにあつたりと承諾されるのですか」

「承諾しちゃ悪いかい。頼まれたから引き受けた、それは自然なことだと思つが」

「……なれば、もしも困つてゐる人がいれば助けられるので?」「わしが助けられることならな」

豊次がそう言つと、はじめて佐吉は豊次を感嘆の眼差しで見た。

「ふむふむ、と頷き、

「では、お頼み申す」

そう意味ありげに呟き、石田村とは反対の方へと歩いていった。

石田正継宅へはさほど時間をかけずに辿り着いた。

もともと豊次は流れ者であるためか、歩く速さが尋常ではない。

「これを佐吉が、とな」

突然の来訪者に正継は当初戸惑つていたようだが、豊次とは

知らない仲でもないため、すぐに家へと引き上げてくれた。

豊次も豊次であまり遠慮と言つものを知らないらしく、まるで我が家のような気軽さで上がりこんだ。

これで図々しく思わせないとこらが、豊次という男の人徳であるう。

「正確には住持さんからだと言つていましたが」

「いや、この字面はおそらく佐吉のじやな」

「はて、おかしいですな」

佐吉という少年には利発なところがあると感じてはいた。だがそれが嘘をつく理由にはなるまい。

豊次が首を傾げてると、正継が手紙の中身を見せてくれた。手紙の中には流暢な字面で、村の付近で怪しい集団を見かけたといつ旨が書かれていた。

盗賊の類かもしれないから氣をつけろ、とある。

「余計な世話をする。佐吉らしいといえばらしい氣もするが」

「しかし盗賊の類だとすると厄介ですの」

「ふむ」

まじまじと覗き込む豊次を、正継は冷静な目で観察した。正確には、豊次の刀を、である。

（腰に刀を差しているが、この男、盗賊退治に使えるだらうか）

村が襲われては正継としても困る。

だが下手に盗賊を刺激して、村が余計な危機に見舞われるのも避けたいところだった。

その点この豊次という男は使える。

刀を持っていることからそれなりに心構えはあるだらうし、万一

盗賊に敗れたとしても村とは無関係といつことにできる。

いわば、捨て駒として使えるかもしれないのである。

（おそらく手紙をわざわざこの男に届けさせたのは、佐吉めも同じことを考えたからではないか）

年不相応に小才の利く佐吉のことである。

まず間違いなく、それと似た魂胆があつてのことであつた。

「そうだな」

正継の視線に気づいたのか、豊次は勢いよく手紙から顔をあげた。

「わしが盜賊を退治しましょう。それなら村にも迷惑はかかるん。正継殿、それでどうか」

まるで正継の思考を読んだかのような言葉である。

正継は頷きながらも顔をしかめて、尋ねてみた。

「それは助かるが、なぜその気になつた？」

「困つてゐる人がおれば、助けるのが当たり前のことでしき。それがわしにできることであれば、ですがな」

「……できるのか？」

正直、その点が不安である。

人柄は信用できても、その腕前はまるで分からぬ。なにしろ豊次がこの刀を使つてゐるところ見たことがないのである。

だが豊次はさも当たり前のことを、

「わしはそう思つります。まあできなければ死ぬだけですな」

そういつて、いつものように曇りのない笑みを浮かべるのだった。

石田村から少し離れたところに、一軒の小屋があつた。

その中に五、六人の男たちが集まつていた。

いずれも筋骨隆々とした荒くれどもで、地道に働くような者たちには見えない。

そして衣装などには不釣合いなほどどの品々が置かれている。

おそらくは奪い取つた品物である。

「結構いますのう」

「そうだな」

陽は既に暮れている。

豊次は、正継に借りた五助と共に木陰に隠れていた。

開け放たれた障子から、念入りに中を覗き込んでゐるのである。

周囲は男たちの灯している火によってのみ、明るくなっていた。

「影に乘じればそう怖い相手ではないが、なるべく逃がさずに捕らえたいものだ」

「一人も逃さずにですか。それは贅沢じゃありませんかね」「いやいや、そう無理なことじやない。当たり前のことを考えればよいだけだ」

「へい、と言いながらも五助は疑わしげであった。

さらにこの時代、後の江戸時代と違い武芸者は軽く見られていたのである。

合戦が主な晴れ舞台であるこの時代では、個人技としての側面が強い武芸は活躍の場がないのだった。

「できるんですかね」

もはや何度もになるか分からぬ咳きを繰り返す。

豊次はさすがに鬱陶しくなってきたのか、眉をひそめてペチャリと五助の頭を叩いた。

「痛、なにをなさるか」

「静かに、ということだ。流れ者風情に叩かれたくなれば、もう少し大人しゅうせい」

「へい、と渋々五助は引き下がった。

主人の正継には豊次の言うことに従え、と言われている。そのため逆らうわけにはいかない。

「で、わしは何をすればいいんで」

「そうだな。わしが今から斬りかかるから、適当に騒いでくれ」

「それだけでいいんですかい」

「刀を持っておらんから、一緒に斬り込んでくれとは言えんだろう。おぬしを連れて来たのは念のためよ」

「へい、と頷きながらも五助は内心『当たり前だ』と思つてゐる。ただの小者に何を期待しろと言つのだらうか。

小屋に入り口は一つしかない。

出入り口を塞げば後は全員を逃がさず捕らえることができる。

もつとも、どこに伏兵がいるか分からぬ。

そのための保険としても、五助は役に立つのである。

「さて、それでは斬り込むとするか」

何を呑気な、と五助が呆れかえつた。

が、そのとき既に豊次の姿はない。

「へつ　！？」

視線を本能的に小屋へと移す。

すると、たつた今まで目の前にいた豊次がいつのまにか移動して  
いた。

それだけではなく、小屋の扉を足で蹴散らし、これ以上ないくらい  
乱暴な突入をしたのである。

「なんじゃ貴様は」

突然の乱入者に、盗賊たちは機敏に対応した。

狭い室内ながらも、それぞれの獲物を持つてすぐさま駆け出して  
くる。

しかし、

（この時刻を狙つて正解だったわ）

豊次は内心ほくそ笑むほどの余裕を持つて、彼らと対峙している。  
もはや夜も深く、普通の人間ならば寝てているであろう時間だった。  
豊次の狙いが当たつた証拠に、男たちのうち何人かはまだ寝ぼけ  
ている節がある。

すぐさま起き上がりて獲物を手にしたことは褒めてもいいが、完  
全に頭が働かないというのはどうしようもない問題だった。

だから出入り口に立つている豊次目掛けて、二人同時に襲い掛か  
つてきた。

当然両者の身体はぶつかり合い、その隙を豊次につけ込まれる。

「えいっ」

鋭く短い声をあげて、豊次は抜き打ち様にその一人を斬り捨てた。

仲間を斬られてようやく目が覚めたのか、男たちの動きが急に慎重になつた。

「おぬしら盗賊だらう。わしも似たようなもんでな、手柄にするために斬りに来た」

「ふざけるなつ」

豊次の言葉に怒つた男が、中段の構えで突くように迫つてきた。しかし豊次はこれを難なく避け、胴をすんなりと斬つてしまつた。血のついた刀を両手で持ち、刃先を残つた男たちへと向ける。

「さて、まだやるか」

豊次の言葉と共に、小屋の外から人の声が聞こえてきた。

言われたとおり、五助が叫んでいるのである。

この緊張状態にあつては、一人の声も大人数のものと錯覚しやすい。

男たちは揃つて平伏してしまつた。

翌日、屋敷に正継の元へ戻つた五助は、盗賊退治のあらましを語つた。

豊次の取つた方法を聞くたびに、正継は首をかしげている。

「寝起きを襲い大声で錯覚させただけ。なんだか平凡過ぎて、効果があるのかどうか疑わしいところじゃな」

「へい。手前もそう思い、豊次様に申し上げたところ……」

「あの男は、なんと申しておつた」

「当たり前のものほど効果は期待できる、と」

「ふむ……」

正継としてはいまいち納得しがたいところだが、実際に盗賊を退治し、何人かは捕らえることができたのだから上々であろう。

しかし、正継にはもう一つ気になることがあつた。

「してその豊次だが、なぜここへ参らぬ。何か礼をと思つたのじやが」

「へい、なんでも『そろそろ別の場所に行こうかと思つ』と申して

おつました

「つまり、また旅に出たわけか」  
なにもこりこりうと/orに出て行くことはないだろう」と思つ。  
助けてもらつたばかりではなんとも釣り合いが取れないよつな氣  
がするのである。

だがそれを言えば、豊次といつ男はこりう切り返すだりつ、といつ  
予想はつく。

それは

。

その日、佐吉は石田村への道を歩いていた。

すると向こりう側から編み笠をした男が歩いてくる。

「もしや、豊次殿か」

「おう、佐吉か」

友人に出会つたときのよつな氣をへたの豊次に、佐吉も思わず顔  
が綻んだ。

「手紙の件はどうでござつた」

「全て解決はしておいたわ」

「そうか。それは何よりだ」

「おぬしはここれからどこへ行くのだ。もしや石田村か？」  
相変わらず不思議と勘は鋭い。

佐吉は素直に頷いた。

「先日、さる御方の元で仕えることになり、そこで父上にも知らせ  
ておこりうと思つたのです」

「ほほう、羽柴筑前守殿だな」

「本当に鋭いな。羽柴様を知つておられるのか」

「あちこち飛び回る身だからな。元は織田殿に見出された氏素性も  
知れぬ者と聞く」

元の名を木下藤吉郎。

天正のはじめのこりの頃に羽柴秀吉となり、後に豊臣秀吉として関  
白にまで上り詰める男である。

「近頃は大名筋になつたらしいな。それで佐吉も見出されたわけか」「そうでござる。実力次第では、私も羽柴様のように取り立ててもらえるかもしない」

「それが今の世というものか」

「然り どうであろう、豊次殿も仕官してみては」

佐吉の見るところ、豊次には只者ではない何かを感じる。  
この男なら、実力次第で取り立てられる織田家において、相当な出世をするのではないか。

そんな気がしたのである。

しかし豊次は一切迷うことなく、即座に首を振った。

「わしはあくまで流れ者に過ぎぬよ。それに合戦でこの剣技がどれほど役に立とう。権力は権力者が持つていればいいのだ」

「されど、今は実力があれば」

「そういう世であることは知つておる。だがまあわしは、ありのままでの自分でいたいからな」

実力だけで成り上がつたところで、その先に何があるというのか。出世の階段を昇るよりは、同じ階層を広く渡り歩いてみたい。

豊次はそう思うのである。

「どうか、それは残念だ」

「佐吉。こうして話したのも何かの縁、わしはおぬしの栄達を夢見て過ごすことにするよ」

それきり、二人は別れた。

去り際の豊次は、実にこの男らしく、

「流れ者が旅に出るのは当たり前のことだ」と言わんばかりに、自然なものだつた。

後年、佐吉が石田三成として関ヶ原に敗れたとき、豊次がどこにいて、どう思つたのかは誰も知らない。

ただ、この男ならばこう言いそつである。

「まあ、人が死ぬのは当たり前のことだ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9906c/>

---

無為浪人

2010年10月8日15時33分発行